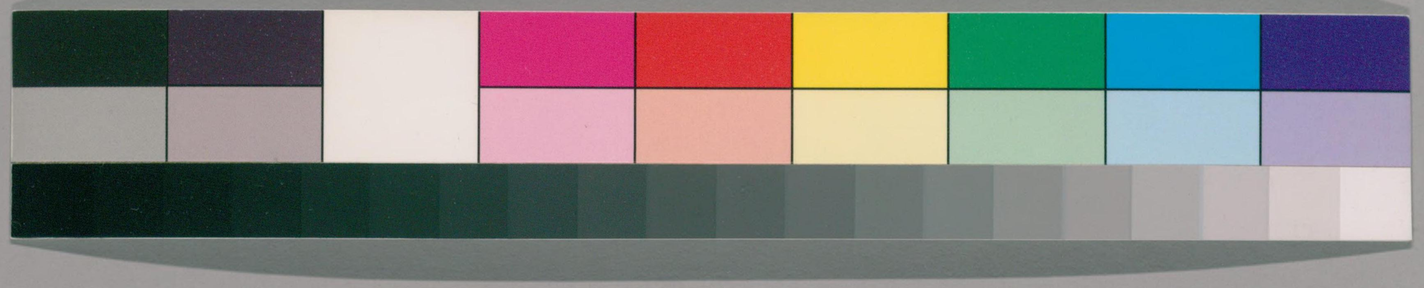


860
27

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27

伊勢参道里程抄序

本屋久八

二ノ二五

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27

ガラス使用

伊勢参道里程抄序

本屋久八

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27

ガラス使用

凡土地ニたくらふれハ伊勢の国ハ山を西ニ負て
近江伊賀大和紀伊志摩ニ隣り海を
東ニ抱て尾張三河ニむかふ。依て世ハ参宮海道（五十三次）
ならびにいにしへより諸記ありしかし旧記ニ
尽くさゞりしゆへに諸国の国ハ名所拾遺ニもれり
参道の大概各郡社並ことごとく便なき故ニ
此書の初ニ冠し侍り

860-27

帝国図書館蔵

伊勢参道里程抄一

自京三條橋至勢州安濃郡新田村

自京師至江州大津駅　行程三里

平安城ハ桓武天皇延暦十三年甲戌十月辛酉
新都ニ遷り給ふよし日本紀略ニ見へ侍り
寛永頃迄は凡九百五十余年ニおよぶ。宮ハ万代
不易の天子御武安泰の福地なり。異邦まで
もよく知るものや。図書編ニ山城ハ国の都やし
諸道ニ訪ふ記ニハ平安城ハ二十万六千余戸。天皇
宮ハ東北の隅ニ在りしを今ハ禁裏ニして山城

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27

ガラス使用

記録に謂所土御門の内裏を指にや
三條橋栗田口をもて青蓮院花頂山北に南
禅寺吉田等人の所在所に人の志る事なれば誌すに及ばず
其一里にして（首は四十二丁）里ことに路傍に双塚を立板あり
柱て道程をしるし其所土の土堤に立てしまにや北
史に韋孝敬に云し人始て一里ことに土堤を立樹
を柱見るより行旅庇蔭とはなりこゝろせし故
図は一里塚にて始を詳にせば
御廟野　天智天皇の陵なり江頃にて北山

神の陵と云々陵村むしに陵のものを司並百姓の通
とりや延喜諸陵式に山科陵といへり万葉に
御陵（ミカハツカフ）仕（ツカフ）れ山科は陵の山と読み上は山なりと
帝を能仕の如く以て日は水陵に入て云々根源
にも御馬にあされ世に神の里なり行幸ありて其
御陵はまはさりなれなり記七日に元亨釈書に以
行容（エ）所土の夏と混雑志る日にやと廟陵記に以へ
敬ノ下ありたことを貴源家多し桐草は夏に音読の
討の組にくるしく記之

小関越記の方は誤なり三井ちは下へ出る　志る谷
越右の方の誤なり五條へ出る　安祥寺　仁明帝
の妃五條の后順子本形にして沿清真雅友師を
関祖とすといへり　奴子葉氏　山科の郷古今集
已下の和歌五し
山科は十下の異相に相とうへて　兼輔朝臣
と詠そうきたるに祈望清海紀
氏に神明の祠あり又昆沙門堂へ行路あり宮文
年中に公海僧正再興ちて延今に文門海經せ

ゆゑ此文諸相明神といふ天照氏命右玉命南社を
祀るといへ是海路記に延喜年中の文蟬丸の頃し
和故四の文門原といへ所ハ明や是ハ山科十八郷
の内一三三ノ文海しまず南社ハ年中の文にして
延喜年中此文と小野小町讀ける云りその歌の集
に見へ侍る又山科の文と号すし
そうなくて世に始るよりハ山科の　三条右大臣
文は草木とすし海しその跡

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　　ガラス使用

なりしにや山海經の郭璞の註に倭國の衣服
元計切といへりけれども小忌衣の袖は紙(カラヒなり)にて結ぶは
古への製をとりきれるなりしに中世に來て
諸列計を作り結ぶ事にはこしに同じ又安の
町に簾おなり絵をえらぶ事に圓圓盃の羽(ワクミ)
なり事は唐土人に稱器して能ク留ムニ意繪事ニ
とも學習精妙なり中國ノ善ニ盃ヲ者或不能ル
なり圖繪宝鑑皇朝類苑等に記せりそれ
我朝繪の事史を按ルに雄略天皇の時魏の

文帝の裔辰貴といひし人投紀し來りて絵を
巧にせし是本邦畫文の始なりにや沿仁帝の
時百齊の畫工河成名を得し世に多く知られ
たり臣勢金圓なり中比には高橋正光明兆周
文所下雪舟雪村土佐狩野の諸人或は青史に
深し或は世に傳たり名畫多し實に著り繪は
いとも拙くしたりにあらざれども此分繪とて人の
よく見る事此頃手に見るし傳りは重頃
文徳天皇天安元年に始て閑を定て此頃を設

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　　ガラス使用

實ハ日吉の神號也となん日吉山王の事ハ日吉記
山家要略記集等に見へたり林氏の山王譚ハ
先人未発の辯論なり　打出濱今津の関と云
所也濱名相院の御旅所に
志まなくて打出の濱と見わたせは
　朝日にさらし志賀のうらなみ
松本　船つきなり是より矢走へ一里のわたし
なり　平野社　右の方にあり　膳所　此間右に　粟津ノ原
義仲寺ハ木曽義仲の墓所なりとて傳ふ

木曽義賢一宇を建て義仲寺と云しを近ふ
元禄比芭蕉大にあとをとゞめ墳土となりて其道此二年
の荒涼院の權僧正依海中興の祖となれり近より
稍衰へ神の前縁となし併せ義仲の菩提院に今村
民寄附せし　高木村　右に並木　八ノ宮　左ハ　あり　中村の在
俗にいふ子の宮の故事にも似て鶴の時といふ文ハ
膳所城の御所なし　膳所　城ハ湖濱に
ありて參議源高統大津の浦に於めし宿
氏閑々京の役所と云ふなりし築近右より

いとめてこれ諸とかりの膳所の塚戸田一西戸田
氏鉄本多康勝菅沼定芳石川忠潤本田俊次
本田康乃本田康慶間もなく且に本多所あり也
より此浦の急まりて此湖上をわたる道此名
山勝比一里の中にあり　前年塚今井四郎か
自殺の地也前年二心なく死をもとともにせし
はあるとむくし未首此暴悪にしてこひ浴沫ある
事あるとなしてあるともに礼儀の意となりし事
口をし忠孝報説に是をといへり事なり

為居村在に石山寺へ行ありて石山良弁僧正
開基にしてめて之輪の縁と安置す瀬田此橋小橋大
橋あり東海道中の大橋の第一なり瀬田矢作
吉田　六郷皆　長橋なり今六郷橋なし
まれの板も苔むすもなり所にあり
来代殿ぬれ瀬田此長えし　大江匡房
此橋上より幸崎野田等此名所殿なるべし
鳩の湖の詠之なりしも西の中き所なり
さて浦やむとに橋に鳩の海の

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　　ガラス使用

行さきをとき望語れ夫の東　安喜門院法隆
年治元年十二月源義朝軍に打ち事東に落ら
出し時新朝臣被出て望語の意よりれ人道の道
よし手治ありあり此意の事なりけるにや右
の林の中稲荷の祠あり此に矢を取あり矢をの
八幡やりせ所末の東一所ありあり天武天皇白風
此年二月勅して聖母の大神を祀りしむと仰諸
君へきり　神功皇后ノ所事と山田の八幡宮も聖
母と同しき時祀ほせのしに慈神帝を宗む代々を

給て源新朝建久此年八月再建ありひしよし
二十二社の註式に誌せり俗に鞍俗の八幡といふ
矢義家殿に姥ゟ縁にてうり競人鞍列安新川
の縁と等しく賣し侍り
自草津　至石部　二里半十七町
正一位立木の神社右の此れの辺を春日を同時と
云ふ此に貴渋所あり　草津川　下ノ新　所愛
上ノ新所愛　此に小女市詞あり　日川　長村　本袋村　の川
川頬村（カハツラ）　勾村（ヒカリ）　千為村　右に以ありの祠あり

小野小野氏の銀青は此所右の方にあり此邊より
御上山程ちかく見ゆ　梅木村祝中敷といふ茶を
賣る婦ハ此一家なりしが御寺に多くなりて今ハ本
家も流れしかひ倍度相列小田原の遠項寺の
如し夜に茶を製する家各堂を搆て茶師伝を安定
す夫醫茶ハ神農に始りて代々方術の士なし
茶師伝ハ醫は祖神にあらされとも慈悲無茶
の所ありて御茶より參りて醫茶を神にいる
にや女產者神ハ家國医茶は祖なりけるとも

康富ノ大荒破茶師菩薩の神社と官帳にハのせ
らしき御所右雪に預念の施茶院使良基ハ茶師
堂建し事あれは中興分の御給と見へたり今は
茶師御を排する者ハ神農を祀る神雪見る
者ハ女產者と參れされハ庶人（タヽヒト）の家に神所を祀
祝享せん事是も又祈にはあらさるか又給に醫師
と称して茶師と作ハ上世醫家に茶師といふ此
ありて御茶は事を曲（ツカサドリ）ハ是御日本記にハ
なりしかなくての醫ともしき也に此しているか直に

佛の勅諭に准し候事にしたりけるし
云ひ蔵　上の村　伊勢田村　今山村　是より
天部之松をしひ立る道也
自石部　至水口　三里半八町
篠町より三町ゆきに正一位吉姫明神の詞あり
是を下の社といふ又町庭より二町をりに吉姫
明神の詞あり是を上の社といふ倭姫の世記に所
佐加浮に多気ノ連等の祖宇賀の君の子吉志比
女ノ娘に吉姫の相ニあり則此所神也神明武にハ

甲賀郡石部ニ麻鹽神社と謂ひ此の方の山に
虚空蔵の霊あり　落合川　麹袋村
平松村小川あり　針村小川あり石の方に天神の祠あり　なりゐ村よし野村
へついの三雲村あり川　田川村　是は此田川の西にあり此也より伊勢路なり
横田川古橋あり佐水にハ是さし永と云ひ　白水村小鹿村此に八幡の
社あり石に御菜殿の指あり　天神の社
大岡村ハ甲賀三郡より古文をいふ甲賀三郡
何の代の人にやおほつかなし
自水口　至山　二里半七町

右の方に堀あり往日長木大義大輔正家在堀
なりし寛永十一年に小堀政一ちゝ近よし此書堀と云り
天和二年の初度明友の朝臣　台命に依て能せられ
て後多年忠敬朝臣の志りよしとなり右の内萬義
の富あるひきせるを製して貴家史和國の郡
家國は萬義のものといへれ家しへよりの富やき
せるは密語にして朝鮮にして桐筒なり千行筒
をうつといふ是密國の名にして班行を生徒
と華夷通商者に書せしものこしよりきたる

きせるは銀湯ありひは靈磁（ヤキモノ）の根本ありて殊さ無く
なり寒はきせるは製軟薄なる所十九院の作る
所と似たり此の郷　栗原　新居　堀家　岩神山
あり海とゝに岩神の祠を立人景清力ちへの石
といふ大異あり　小野　今在家　伊奈川　安に
清水あり平治の乱に源の義朝　長田の居国を
称ふ浅張に在りしを思致これをこゝろして
彼首を持上京せし時此水にて洗ひ事云傳ふ
今宿　大野村　比良の嶽　徳原村　いさの川　右に流
れをそのゝと云

市場村　鑵子山　岩室村　猪鼻村此あたり土
酒をうりとして賣る茶亭諸所にあり今ノ福州の
紅糟ハ古へいひし醴酒なり麹を用ひて挑咜（スクモム）
といへり俗の一夜酒とはしかなり　一座
松ノ尾村　春のはじめ田畑をとらん　松尾川有北国有あり古
の宮の入口なり
自土山　至勢州坂ノ下　二里半
宿に掃をして賣る又夏ハ蕎麦切好てそて
旅人に歩を止て食せしむれハ蕎麦切ハ元北国
山家村辺に饂飩なりしを今ハ穀部則に好之あり
王禎か農書にいふ河漏（カロ）ハ二家国の蕎麦切なり
といふ人あまたも有ひと云り可也云剣鉄とハ
いふて信花の山に黒石有行人目を留て見る
正一位田村神社の前に祠あり鈴つなきの
松とて古松あり　坂上田村麿ハ従三位苅田麿
の子にして武勇抜群の帥なり身長五尺八寸胸ハ
厚くして鷹視赤眉金面鉄を稀し卒底請
まるに老とかれ歎ししよし日本後紀にみえ

そり来征の大切に依りて祀を立て奉せしむる
にや田村川田尾生野村此あそり館を練
てうは蝸坂蝸の石塔往日巨蝸の妖怪
ありし所といふ其ハ谷多不俗に八百八谷といふ
此條より水うゝ水口は城ヶ原ある猪異(イノ)
山中を興の木村沢村山の所しき面谷所なり伊勢近江境
足より九曲(ワラツリ)にわる所に高原山あり條の茶屋
田村堂鈴鹿神社右ノ方ニ三ヶ世に傳ふ鈴鹿前ハ
天照太神は母神也と此説據ナシ一説に天武

天皇伊勢に遷りたまひし時鈴鹿の義導法
けしせる其二種の祠といふ是も又実深に起しか
なしきや鈴鹿の明神ハ倭姫世記に謂川俣縣(カハバタノアカタ)
造(ミヤスコ)の祖にして大彦命を祭る之紀記に見えたり
小川あり是を越て究り坂なり此の山の洞に清
瀬の観音あり
鈴鹿山 さしらやま浮世をよ所にありまして
いうにたりの所に永なるらん西行法師
梧桐松 さしらやまきりはかり来の九来

覚ゆる琴の声に通ふらん
秋されは松も西のあらし吹也
庭と露その立ちこの坂
又は我苦坂
此等の名所多し猶つぬへし

自坂下 至関地蔵 一里半

むかしは坂の下に川流て鈴鹿川瀬にありしか一とせ洪水岸を崩してより宿を今の地に移したりとそなり 新茶屋町を草薢(トコロ)を堀せける所なり 沓掛村 猶ノ木村 坂下に奇談(キタン)怪異なる筆捨山とてかしこは絵にも写しかたき風景なりし故にて 坂下に余右天の岩あり 一の瀬 大黒岩(なこくいわ) 蟹(コヒ)岩 鈴鹿川は関の新所之中町より東へ北より流る小川を云 此水上はも云山よりおちくると也

新代よりいく年ぬりなそこの川
八十瀬の浪の秋の夜の月
源兼氏

坂下に伊勢屋あり是を甲(カブト)鄧と云古の東海道

左に観音山にて高山尾也 治康此関ハ孝徳帝
此日経二年に始て諸州に関を立のひし相武
帝此延暦八年に諸国此関を廃しのひしを
治康此関ハ東方の第二関王都の国にしのひ
し近江国鹿坂伊賀国治康貴清国不破
を三関に伴侍りし今年関門終て首語の
知識になり也

恵そ恵也覚やまとゝ此せ報なれ
始りまてゝ報覚の報ゝ

桂中納言定家

蝦夷様 関此地蔵の後西の方にあり首ぞ人
様の様と此所に法しは是は根つきて家へしを
世に見てさくしといひし定りの歌と見とよみるなり
湯(ユ)都(ツハ)婆(猛)村 関の宿より二町ほどの川上にいふ事也
万葉に東に祈ゝ方によ見ゝ名所なり
川上此ゆ法ハ此ほどのうち古紀事
下ゆけて家やたく祈む 家隆
都(ツ)追(コ)芬(ミ)井 関より九丁ほどり 門川の事古
歌の西にありむかし 大神宮此神馬を流し

御手なりと云ひ傳へ候り

自関　至　宮渡田　四里

道ゆゑ御関の跡はそこ也

ゆりもへるなり友よそしかなり　為政

此蔵院ハ傳教大師軍剣の地なり文殊ゆ中間
深なりしを文永四年再建ありし宗聖一体見
ゆて御分讀也しまへ皆是也百年此宮ハ苦行
をかつり大縄にして壹百宮を出に起りしへ行けハ
東海道無山へ出り右の方伊勢宗宮の路なり

古歌（フルヒヤ）　菅聖　林村　長成村　標本（ムラ）　一里関より
鷹尾　豊久聖　鐵城村　右の方にありむかし
西国より東国をしぬへ宗宮せしか此聖にて
大神宮への路のすゝを問しに十四日を経て行
よし不の共歌き教ゆるは此しもはやそうゆ
まをなきてそこなり村に路費（アタヒ）の鐵とかけて
出に降りぬ此鐵塗の目にハ蛇とかへりこしせの
須ての鐵を宗宮せしに鐵むかしのとかありれ
むかしと云ふましにれもひ是を経て宗宮此本を

とけしとなれ　望勝村

自窪田　至安濃津　一里半　頃新

此百に一本田当領寺といふ大なりしに西方田門従の
本山にして准門説の大地なり今此領に花山院
前様大納言侍實ノ氏の会寺にしてや　喜村
長野村　新田村花の方に関東所あり四日市
の近分より此所へ出新なり是より西国東国
此余又人下道となりなりしくこの事に記せ
里程抄一終

里程抄二　尾州那古野ヨリ勢州安濃郡新田村ニ至ル

自尾州名古屋　至宮　一里半
那古府城初今川左馬助源氏豊是と築て
居迄り織田伝説当平信秀大集て是を作せたる
天文中猶相国信長領して林佐渡ちとして
監せしかたまひし後に平器を以て前親吉
城を守迄り当長十五年庚戌更に大城を
修造し　敬公を封しのしに寄に万世の法基

にして八郎の倚頼なり皆神社仏閣化に異
なるも侍りけれと是に人の知る所なれは洩し
清さんと顧事の所に墨中の表 棟(いタヤ)後の墨なとは
事ふるる所なり中の表は日本武尊の御陵之
今俗にぶんぬ山といふにや
自宮 至勢州桑名 海上七里
正一位 勲一等 勢田大神宮 愛知郡千竈(チカマ)社
勢田の口に立り是を大文といふ俗に之つこ又は
号そ是高社の御夫人は尾張連清稲の記及

原の村松朝治の記等に詳なり正一位の神階は
康保の御記に出たり永正六年の講式に日本大
株梁勢田大神と称しなり玉史及ひ大文国家
義の記代々の宮府遷宮の記等を手故とする
へきかも出用殿なしひ立ちて神お殿の源秘あり
正一位八劔神社 本宮は南にあり元明帝
の和銅元年九月多治比真人(タヂミノマツト)比守を勅使
して建まり給ひしよし御記に見へたり正一位の
神位は貞治三年は本国恬に哉可しされは他列の

人やうとそれは樂田八釵と一社の中に心得
侍り既に神名或分てしるせし社地名列にして
法雅の東仲も又是也今社侍に大宮八釵日剣（ヒハリ）
御子大上（ヒカミ）婦子（アネコ）知神（ニヲカ）麻高座倍御子云所に大
福田の祠を加て樂田七社と称せし摂社の神名に
従之後浦ノ宿禰貞倍更久元年此記に詳に
しるせり　将軍家富士御詣の記に
稱まことしらくに樂田はしらせしら
言ひしやうき旅の由まことを　堯孝倍郎

海上より東麻兄の室松浦の室此御詣ありまた
星磯嘆（ヨヒツキ）賡の浦は塩屋すくに石田堀川の境
の百首に
星磯や樂田のうれいなり大の
おのこしらぬやれそしてこそ　仲實
新猿拾遺
嶋海深夕波なり　立ちて
友よひつきの濱にしらしなり　慶阿上人
嶋海此浦より南にしらふに松雄の嶋海の浦等
見へたり皆知る所の内なり　万葉集四鶴旅の所に

桑名湊より舟にのりて熱田浦に
あさむくるは　沖に漕出みむ
伊勢路よりふりさけみれはあつたのうらに入船
而此海上船渡也

是やこの尾張の海に出帆せむ
いせをへて木曽の近江の辺　大納言光俊
渡来ありて熱田の方は出帆ありむしは此
し渡尾張の国なりしを豊臣家の時よりて伊勢
に付属しけりの出船の渡りは滝川一益同大臣

信雄（ノブカツ）関原以後福嶋正則菅沼定盈菅沼定仍
菅沼定芳松平定房松平定政松平良尚松
平忠充皆山正忠とゝは川内の城と号しこれ
世に所謂尾張八丈は此にて此所より織出せしゆへ本
此織治にあつかりけるとかやたの方に地蔵堂あり
西に渡の地蔵とかいふ名古屋より佐屋へ
行て川舟にて桑名へ三りかと云ゆへ三里と号し
名古屋一里宮塚　此間木曽川　万場一里半九丁
押（カ）羽（ニモリ）一里半九丁　佐屋又津嶋より舟にて桑名へ

引とよし梅えんこいせ名所拾遺に詳侍のとあり
此方は是より下なり
自雲出 至三日市 二里八丁
此海濱より右の方安濃山まちかく見えより其外
彼は一目連と名りて世に怖し現社の中におゐ
神代紀上の体にて古は伊勢の風土記に古人兼
居の都市郡の根より二つめといふ事を拾行
垂田大神にまりけりて之人停の神は城郭也
伊勢ノ国司北畠氏ノ嫡孫一志郡多気ニ住ス後多気郡田丸ノ
御所領有郡大河内御所坂内の御所とて将ニ命ぜて

鑑セシム是ヲ国司ノ三大将ト云ス又其一志郡波瀬の御所同郡
岩内ノ御所度会ノ御所ト称ス之官ヲ之子之家ト号ス高家
是ヲ護しり 雲出の城ハ国司北畠氏代々領之国
中の諸城皆彼一家守之文禄年中に一柳直盛是
其後氏家行広本多忠勝本多忠政松平定勝
松平定綱松平定良松平定重 宮原通府の
方に春日の社あり延喜式の神名式に雲出の神社
と傳る所此社の事なり今社家傳習の説と聞傳り
しに社内にある諸神社とも 建雷命斎主
命とをまつれば春日の神社にて天児屋根命姫

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27
ガラス使用

大神を祀る奥の御前ハ毎山神社と称して北宝の
神秘ありと祠官侍りぬ天武天皇の社瑠璃町に
ありむかし天武天皇大友皇子にあそ見せ
ましくて東国にくり給ひ此所にうつりて志り
そしまゝせのひしを御詠し王申の記ハ日本記に安
尽くなり 先田村右の方ハ土とのしく見えたり
大福村 やまなか村 町や川 直井村
なとの天神 旅布毛村 星川村
うきりあ是は橋とそなしぬかさ故の

立りたりしに星河の三川 長明
星川ノ社鄕田村の川むかひにあり式内ノ神社也
星川山 安波寺 加義村 此ノ蛤を焼て旅
人にすゝめ 朝明川 王申の役に天武天皇此
河を過より 皇大神宮を遥に遥しのしとそ日本記
に朝明郡迹太川といふ是此事也 朝明山
この神ぬりあさ事此山の表現に
庭をとりけて蔵をちりけり 定家
松寺村 前田村 留田村 小村 業師宮又

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27
ガラス使用

茂知福村右の方に古城の跡あり又八幡の社
あり 波古村 川 茂知川 川を越て川につき
右に行ば菰野なりこゝのは温泉ありて
近年人多く行
自四日市 至神戸 三里
四日市とは昔より毎月四日市をたつ故名付
はかりてとや今は六日も市をなし所の人申けり
四日市町の内に諏訪の社あり三重河原
我はそれ三重れ河原にいくへし 之

世にさまぬて夜をこえし川 季経
浜田村この辺右の方は松原なり 赤堀村
此所の跡に依て古義秀は此里より出と云伝へ
神明の社有 かざけ村 日永村 神明の社有
行ものひぬいさまに引しに道らん
あさけとる道くし日永なりけり 長明
右に古城の跡あり みやまとの森右の方に大くす
追分の銀杏の木右の方にあり是より此は泊村
追分 右は京へ行道には参宮なり此所茶店多くならひて

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　　ガラス使用

名のゝ称也り祐戸地を祐戸友豎生田雅長
織田信孝相宋鎔家瀬川一益一柳直盛一柳
直寧石川綱長石河綱良石河総茂又こゝ
より一宮をかり葉のゝ若松村といふ所あり天平十
二年聖武帝御幸の時に読せのひけり
いとにしひとりの松原見てさせは
瀬干れたるに田鶴 鳴瀬日
町末原原宿をつ也 稲生原 やそせ村
ひ田村 玉垣村 神庫の神 白子

殺にあらしきといへども旅人を留め給ひ人馬自然
らさりし所なりれの道のかを江南を栗間
といふ
立ちれ也ゑとりくりまれいなむしろ
立ちゑ祢れなりれ旅をかしき 長明
祓徒天皇の社あり白子に深谷の祓をかりて責
家なし
月朝も白子れてまの月見に
なるを見とりにしへ見ゆる 祈恒

此處左ハ海ちかく浦ヲ川日ハ波の声ハしかまし
寺家村ハ名にあふ石所様ハ銀壱寺といふ寺ハ
俗に泰産の銀壱とて此里の姫姉産帯ハ
七月と申れ凡たる事此夏ハ此ヲ云こしまハなし
云へても笑(ケイ)無衣(ナウ)便方に般常此事を記せり
折言ありいつもさそ此花なれは
みなんさんや顔盛なりし
（元本ノ三 楯徳院）
いそ山 大列係 古今著聞集に伊勢至列係
といふ所ハ前刑部少輔平忠盛くなりしに

浦人漁して人気を始めり年を記せり夏此事ハ
自上野 至安濃津 二里
中瀬村 小河村 此日に小河ありて東より西の
うえ流り逆川といふ父老侍へて曰婦人帯下の病
ある者此川にのそみて至いなの紙人を投して贖物
とし祈其はこまたりしありとて至いなを栗詩及
ひ南至ちの所前にあるもみなさんへの遺
流にや華陽国志に沢下流流く検情なれハ
例流のとしといふ夏云要言に水例流者

滇沈といふなとゝ見へし我国にも有て逆川あり
町屋村根上右の方に一才田町屋寺見へたり
此寺ととしハ釋親鸞開基にして下野の国にて
しを出御門院の御宇親真恵受ふつて当国
流の本寺と加りし深さにいつとの頃の清源あり
ていとに現をし　高田山ト号ス清源川院嘉禄二年下野
芳賀郡大内ノ庄高田村ニ立り親鸞本歳迄
郡田川右のうちに東郡あり郡田村是より東国堂
の宗文人同しき頃の事に来りしことし
伊勢参道里程抄二終

伊勢参道里程抄三　磐州安濃津より
同国山田にいたる

西国東国の也分　四天王寺　塔山ニ云山此端の茶屋
左の方也　塔瀬川　銀壱寺といふ寺津の町札の辻あり
恵日山と号世に云玉府の阿弥陀と此境内に有地ハ
右のうちにあり町よりハ見へ也受に屋子布を織也
自安濃津　至雲津　二里
津の地を織田左中将信包富田知信富田信高岩
堂高虎岩堂高次岩堂高久岩堂高睦河口の関

万葉集の撰集廣遠なるに歌あまたアルヘ侍り
名所也
くとりなく月とはしてや川口の
関のあらしをまとをなるらん　後磯（サカ）磯境
川口は十六郷の惣名にして昔の関の村なり
年さるゝなるに汴より坤の方四り斗侍りにや河口
の上田村にいにしへ在原の多方が碑ありしと此記
にアルヘきり関は聖武帝の御幸の時にて侍りぬひし
所之是を関の文と申せしよし続日本記に見えたり

南のうたえ居所あり　岩田川　八ヶ村　八幡の
社は松原の池を貢はたもこを制て貴家多し
たもこは都国にいにしへ有りし本草洞詮に煙
草式は相忠草と云草なり良岩を多もこと和訓
せりは誤りなり芝峯類説に清婆姑の字也なり
元（ハン）響語にて侍家又此意浪にありしなくの
貝を多くつなきて貴りさしは伊勢は蛤の
よ所所にて蛤（貝ハ）合にも来る名の貝を上ぶとせり
三才室宵貝紫貝さくら貝なとし和之りにも

五くよめり　阿古木の浦　道の邊に志れ御言
ありやうてこれより行所侍りそれとも所をより
演ゑなりむかし阿古木と云蜑人樵戒を犯し
て此浦に志川ゆられしとかや今に一堀（タイ）の古墳殘り
式人の日あごきに安濃也と阿古木ちゆつゝ云聖徳
太子の御文として即自作の像を安せられし
且鎚守阿漕明神の聖靈會は毎年七月法事
ありしまた今宮の等なり其子此僧侍云地を
細寺を太樂山上宮寺といひしとなれ今はの

うけしてこれには侍らず
冬姫かき阿二支の蜑此を同來に
ゆきつゝそへくれ也りうしかな　は宇玉御
たるゝ村　菜師の法乃とていさ祝なき法乃あり
垂（タれ）乃（ミ）河内宇唐伝朝臣は此所の人なりけり
後磯磯院に仕へまつりて有中（セイ）悪意（テウヲンイ）ありし
ありて大文大納言維道口によりて諫疏と違ひ
云贄せさりしかは被仕（テンシ）して宮に降り嘉文記記
といふ書六十余巻と著し竟（ツイ）に延文元年有

下世（ヤセイ）ちゝの九千六才なりけるとや朱子の書始て稱ふ
に来りしを讀給深く考給しのひけるよし長海
草にくはしく載せ侍り今ハ前の人にかはりの
事をしらず　右方の事　日本記にハ右方
ともあり雄略天皇の御時去の国を得て
朝夜にありし比とこそ陶し氏と贄土師部と
姓を称せしよし雄略記にみへたり
あらハ前も今代の志なし此みな記なり
いのりかけたる所なるの　すゝ
皇后宮ノ下部

祇分に多くよめりむかし皇太神御遷幸の時右方
行極の文に此年まし侍せしよし世記にみへたり
自雲津　至松坂　二里
雲出川ハ鳥谷の木村と例川村との中間に流れり
雲出川せきいれてまたり首代ヲ
あ御の方にしてうつ　ひろへ　後拾
川より東に矢野と云所あり世に所謂香良洲の
御前にて其たりしまゝ式に須氏ノ祈社と謙給
俗侍ハ紀州栗碍の御神と祈なし御事なれ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

祠官の説ハ稚日霎尊をまつるといふ大同年中に
安濃郡中尾村といふ人の娘香良姫大伴文字郡
為に盃を渡して歌よみて文字を読ましむ之
て後娶せしより香良姫を祭ると云とぞ

梓弓矢をはきて神にまつりけて
たすきはそのふさなりけり　　従三位行能

左の方に伴部の国府川といふ名も又伊勢の浦を
一志の浦とらし

伊勢島や一志か浦のあまたにも
かつかぬ袖はぬるゝものかは　道因法師

云出村　はくせと村　尾は村　之瀬河川ハ
もと尾はと松阪との中を流れたるを川と云
むかしハ東は津ちうく通す侍りしとぞ今ハ渡路
川にも橋をかけていとやすくなれり

みをつくし雲出川舟わたりして人の
まさとふみわたる伊せの　まま　あれ　　寂蓮法師

又後撰集に君か伊勢へ下りけるによみて
きゝつるかくてみありてやなかなる川

中川ハ神ニそなう都ニ堕るなり

名所拾遺ニ

みそなりはそさそそにぬりしゐとゝ川

そてとゝ中まの志ほくなりけり

神宮山ハ此川上なりあきらしいふ右に伊勢路ニ

是とゝ山と鄰ともいふ　云新菓屋　市場ノ庄

御め村　清ヶ本村　舟江　松坂の入口なり

利生山菓師寺といふ寺ニ光明皇后の形にて

行基開基せりとゝや　松江の八幡

自松坂　至新菓屋　坊ト云　三軍

松坂より此のうちに須田村といふ軍ニ兼田共清正清

ヶ古軍なりけるとて海道よりわかりて松坂へ行道

城ハ所の中右の方にて松坂此城天正十六年に

兼中納言氏郷松ヶ嶋の城とうつし築造なり

其後古田重勝古田重治お續して是を領也

元和元年より紀伊の附庸となれり松坂の祿ハ

蒲生家名付し也し元トハ唐の西ともひし其

所をつ也より田尾并大河内へ行路ニ大河内ハ

北畠家代々伊勢此國國にして居住の地也
し今ハ候宮の知識となれりとて
高盤坂　下村　上川　いか所　今別坂
民家茂此笠を経て青り菅此笠は我國
上久よりの製にしていせかぶ木の御神にて
条の附国りす忌部氏の書に見へたり神代
に帆負神と笠ぬいにたなし給しにて
豊原　神行明神にてこちれ此に小祠あり
桔田川　川の名に又智章あり式に桔田川の

浮をしに云此社なり倭姫命市桔を落し
ひしに此に居付けるよし世記に見へたり桔田の
神社ハ大若子命を祭り侍りて万の人社地を
見たり小山の明神といふ書か稱へし
きこう侍桔田川にやこたりしん
神此てあそ打ひけぬらん　後村
稲益川　太神宮式に所謂多氣川ハ是也又
幸橋ハ内外諸社記に見へ侍り今ハ青り今ハ桜川
といふハ昴多氣の別名也　花園笛川なんにて

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　　ガラス使用

続紀に見へたり又より伊勢内親王も下向ありて
いつきたりしに後三条院延久元年俊子内親
王をト定ありて斎宮に定められしよりは辞
行に及ハざりしてかのさせの後醍醐院元弘
元年に祥子内親王を斎宮に定められしかど又
程なく京より御退下ありしより後は絶て斎
宮のたえやこの宮の跡ハ村の名となりて斎
宮の跡まては栃のみ名残なれども絶しにや
土御門院紀に見へたり

いつかまた斎の宮のいつかれて
しめのみうちに塵をはらはん
西行法師

夫伊勢は斎宮加茂は斎院とて皇女を使と
せし事は唐は睿宗その二女を女冠として
天皇天后の福を資られしを通鑑綱目に此を
なりと譏せり吾国の斎王も又是に等しきにや
にや然るに唐帝は方士の妖言にまよひ仏法の
眼をかすめ不忠不孝の禍をまねきしに吾国の
王は正しき神の御心を伝へさせ給ひやまし吾国の道を謹

人家神帝の祀とするさはめ事を下ちへき
御河池
去とし生の三河の池のあやめ草
なりきあ是しに人もむかなれ　元朝文政集
齋文村より良の方一里ばかりに大淀のうらにて
皇太神御遷幸の時浴泉大淀によりこれ
の名なりけり係姫の命やうて大夫度の社とも
きらひしとうや
大淀のみそき来(イク)仰ばかりぬるれ

かきさひてたりうらの時照すれ　源惠隆
古しへの頃ハ齋宮の北の浦ちかく巡り大淀へかり
て山田入よし御設にみくらり此辺に古松山安養寺
といふ寺あり明星の菓屋の故事此寺より事起
せりとうやちかきとし寺より菓坊を頃のうる
けるに立て清水の榜とうくく安養寺の開基
佛通諱大慧宗二癡瓦自一平等と号聖一国師
の弟子也　明星の菓坊是を明星の菓店
といふ俗に本菓屋といふ新菓屋出来てのち

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

たとへ以五国所々の旅店にて茶を賣
て賣侍り此言對おなしに茶店といへり是也
我国の茶瓦を年にしたりこしへも能きりて中
叔丹が海東諸国記に人喜啜茶路傍置茶
店ヲ賣茶ヲ行人投錢一文ヲ飲一椀といへりされば茶
吳邦久しく賞ひ侍り歐陽云集競晋以来
茶あるよし見へたり深澳が雲谷雜記に曰妻子
春秋を行て粉そのうえより侍りよしといへ是ものを
にハ上古にしたるさしし演舎將軍家の時より

にてあるにや東陽に茶をめつらしく志りし侍り
よしといへども僧俄天皇弘仁六年四月江州志賀
の幸侍に幸ありし時寧福寺の永忠僧都を
つかし茶を奉りよし但説に見へたり又惟宗孝
言が茶の賛に蜀茶佳也の語あり是ハ後茶薩境
の時移れるやもてあそひしまし時ハ海人
藤春子云が茶いにしへより五朝にあり横茶
の節會にて内裏にあるにて行りし云年議式也
其上僧正入唐の時かたして渡たり明五上人是

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

いなみ野くはれつゝす
中空を 雨に大伴山かけ
きこゆるは先中きこせと合て見るやう
よ河は雨にぬれつゝあふへき 俊成
又中き時と明けて原はなに古き言ふ
月夜よし明けは原の夕露に
さしみえぬ日衣さめぬ也
たかしの松 離宮 離宮院ハ豊受宮
古社坂もしける也 湯気郡沼木郷（ヌキノ）

宮河原にありしと延暦十六年八月湯田郷
塩部村にうつしの宮し宮所に見へたり今ハ此所
此宮社もなりて光と離宮といふ此社ハ天
平勝宝八年官司湯田朝臣子松といふ人建
ら送給の天照太神命にて奉る也中に離宮院
うつしの附法物より宮にうつされさせたり
ことを記に見へ給ふ又神役撲殿の御殿あまし
神麻績機殿の織大垣内村井口村等にあり
神役部連神麻績連の家久しく絶となて近

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

侍りしを一ノ祢宜園田長宮此二氏安徳の御宮
ありしを移柿を寄て庶祀を奥されたり
より神衣祭ニ二氏参りて中古しへの礼をとり
し是もまた昭代の強しなりとありけるを見へ侍り
小俣の神社ハ社記に宮賀此神社と侍り式人
の日宮賀神ハ紀者此まの日所弁才天経に書
きり此ハ此社号も習合家此名付り前ハ即ち日本
も弁才天経今五本あり是我国中古杜撰の其の
侍り出せし書し各御音集の本に辨せりかしし

自小俣　至　山田　一里す

岩出里

きと方やわ山の書を惹しとも
いとてあらくそえり人もなし　俣野

岩出山ハ文川の渡しより一里計上なりむし
是ハ其の所館なりし　是文川　文川とそうりも
ひ山万葉集にはは弁文川ともいへるまたそうへの川
の名ハ八雲御抄和宣名寄にはなり嘉永元年
九月平家神領を貪暴せんとせしに重衡師殘

昭ゝ此川を修(ノツミ)ゝ日に神呉の事ありていくさを也
しりそきゝ日清聖そ不敬(ケイ)を悔て却ち境(ワウ)防(ミ)を
籠ゝしゝなるゝ是ゝ日ゝそ此海ゝ元より神明ゝ
中丁ゝ此に属しゝ日を神人(ヒヤ)にやて去(イン)し延
寶四年の夜ととのゝ神明にて殆ひ海(ミ)上下下に
ありて今ゝ日ゝ下の
ゝしゝなり

ちきりありて今日宮川の夕ゝ
なかき世までとけて移まれ　定く家
宮家の事候此川へ入て垢離し侍日いまし事

神国汗(ウ)襁(ヨ)の時海水をあひて矛(ミ)絮(リキ)ありしの上久
の風俗にて呉邦は雪にさへ見てみへそり永正記に
神人(ヒヤ)罪殿の日は体俗に御川(ミ)水(カハ)と用ゝ事を
見ハ五十鈴川の水の夏也されハ男女あかるゝに成て
水をあひ侍日さ侍上古の野俗をさもあ是今興にて
宮僕読などあり人の雅人に立ましまりてみたりか
ハしく深俗にしき事にて見へ侍ゝて敬神の在の
禮を守に謹言侍りしゝ心を人ハ流俗にしたさ
かハすして可なり　中河原　此所前縁の比丘記

五くうこうひてあとを見侍り浮屠の法をわ
らはかたち作りまりさ法いとあさ法し
夜浪の里　陣牧の池を種々ゆへ流原
の家ハ聖庵村に在て志れ人ハ来りへきかも
大間廣町　大間玉生神社れりまれ俗に花
れ家と云　上のくれ　下中の口　上一志
下一志　八日市場と云　月讀の家ハ家庵町に
れりまれ兼元此年五月廿二日家号をもい
せのに　高河原の社月よしの家のあの東町
なり今ハ西河原といふなり
上鈹　才鎗　下鎗　町屋つくき
詔刀師の鈹を立法しなりていと云れり
き所なり

冥程抄三終

里程抄 氣宮之巻 四

自外宮　至内宮　四十二町

内宮外宮の号ハ天暦の頃ニ始まる橋云節（キントキ）祢
神ニ進しと古記に見へたるも御事本記古事
記に外宮の御名いちしるけれハ相いなしへもの
祢としるへし
凡外宮へ来るハ豊川の外下馬の橋にて箭筈を
刀等の兵器を止メ一つ鳥居の前車宿により下馬
直へし鳥居を御門といふ也草履木の敷ひ拵深

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27
ガラス使用

の衣類禁ぜきなり
相(アイ)ノ社一ノ鳥居の左の方なり今社なし
祿宣齋鏡一ノ鳥居の右の方なり祿宣ハ大神文式ニ
内宮ハ祿宣ハ從七位和文の祿宣ハ從八位とのせ
られし會麟院の天祿中年行真神主從
四位ニなしぬひ奴夫より位階も次第ニ高くなり
て後磯磯院の元祿二年ニ氏成神主從三位
ニ到て近し後ハ五宮ハ長宮多り三位ニ叙せ
られ近し近き比内長度浪の氏富神主政年

勤労ハ功ニ依りて始て從二位ニ叙しトさ給
とうやいとうて度ためしなりけり
神庫二の鳥居いにしへ齋宮女御の御禊宿
なりしとうや今事幣使大麻御塩湯なとなり
行ひのふ所なり
九丈殿 諸國の大社にてハ勅使殿といふ勅使
を答ふる殿舍なり 七丈殿 廻榊
二株柄 奉幣使監洗木綿繦王串なとなり
行ひのふ日地なり御池諸人手水ある池なり

伊弉諾　伊弉並ニ神拜所　石檀前ノ途洋不
僧尼相所　元亨釈書ニ是を非し給ひ宗廟
の祭を忘るゝより故なり　三ノ鳥居　小鳥居を云
荒垣御門ハ四の御門なり　斎主候殿
所紀久しかりしを近年造近ありし
朱雀院の御宇斎主嶽子この所にやそしせの近
よし　菓葉抱かり鳥に見へたり　石臺　寶ハ版位と
いふ三ノ鳥居の西にあり　十貞の祿宣　神洋の所
なり別に一所詔刀を宣あり　東に二所　鳥居

文司の神洋の所也別に一所是鳥主或ニ文司
宣命とよむ座なりとかや
王串御門　今諸国余宮此男女御門のあれて
洋之なり　蕃垣ノ御門　陰籬御門
是より内御内院なり

外宮正殿　東宝殿　西宝殿延喜式ニ云在ス度會郡
沼木郷山田原ニ去ルコト大神宮ヲ北方七里ト云ヘ六十里
自御鎮座至宝永元年凡一千弐百二十七年也
豊受皇太神宮ハ内宮迂御の後四百八十二年ニ

あらりて雄略天皇の二十二年戊午九月十日に
御請祈之事不を山田の原といふ神名祕書に度會
の宮に祭し大田命の侍ふは永雲宮ともいふ侍人
守豊の家をおしまるゝは源氏平家なと皇別
の人ハ國常立尊に拜し夜原中須賀原等の
神別なる氏人ハ大鳥中主尊に拜しまるゝ也
是小縁なしあるありて名方を守る道なりとて
まゝて宗宮の家一ノ為所の内必行なりて返り也
中央の置道を行歩事思慮ありしきよし永正

記に見へ侍る此事ハ古神宮のこうきしも諸社
にても神門の内にうゝ必ず侍りしきなり又唐京後
おしまるゝは御正面を恒りしむ雜請之間り
指さしなとしてなるゝ敬戒論とて平時見
ハなり今宗家の諸人北御門豊川の下馬の
橋を南へ越して高の家の為に拜をして宮中
に入れ所の近きを經りして通り侍る大十式ハ一ノ
為所より宗へきまし

かきまくとかしこき豊の家相

なれなこてあいかゝにしたりしれ　後輩

萬神一万変ノ自ニ心臺一上明今絶ヲ點埃ヲ
若ニ識ニ虚灵無躰一許レ君親リ見ニ國尊一来　山所敬義

幣帛殿　朝廷の大臣及ひ諸侯の幣物を受ル他ニ
高宮　和宮第一の別宮　内宮の諸別宮の神名畧之神名
唱記と見てしるべし
福年神事場　俗ニ花祓所といふ　神供御竈所
内宮遥洋所　石壇夷祠（エヒスノ）　土宮　此宮北ノ方
の山谷ニ造宮の時山口ニ祭の神事の所あり
神供御竈所　山神祠　土宮ハ大治二年六月

五日宮号を授ひしこと
月讀の宮遥洋所　神供御竈所　下ノ御井
俗ニ流し水といふ此後の御井也　風宮　此宮ハ
内宮ニ祭り風の日祈る宮と作しなり和宮の
祠宮口傳あり事ハ　神供御竈所　風宮ハ
正應六年三月二十日宮号を授ひし
四所別宮遥洋所置石　御池の所中央ニあり
祭宜祭祀の日宮ニて遥洋せしの今もあり及ひ
老者婦人童児ニ至るの宮ハ此坂を望り坂を曾

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

来りて造酒を初めらるよしあり古神文に此等
をもふしまして奈貝(ナリ)の嬢神を記しの蓋し
故ありてそ侍くきし侍りし
御饌殿　栗皇子神とまゐる事を御供無
日此殿にて調をせり　調御倉　忌火屋殿
御祐倉　上御井　御改印ノ御倉
御気殿本記供奉本記等を按するに御法然
の後聖武皇帝の始まりて此所にて神供を調
し内文に持たこひしに神無二年の三月故

ありて月令以後に有にて
皇太神の朔夕の御饌を供しまゐらへきよし
左大臣藤原武智麿を勅使として令しめひ
しより今に加く二所の御供を此殿にて供奉れ
とかや実に異常の御領に神代のまゝの礼にて
民をあつまとめしまゐらせりと侍へ取りと云く
我と人の盛饌に出さるあやし心と見えてもあ
れ記侍りしき事とそうしてもあらず礼あり
に社左侍に植が二年の侍に清廟の饌に坎来食

不斐（ス ヒラケ）をなといへるも同じ事にや是橋をしりそけ
倹を眼に志のふ神意とかやされは宴遊餐饌
の制に天平家の勅に初めて代々廢着をかし
のひしも末の代にはしてしさりにや續皇正統
記に是を嘆やり
哀御門　愿舍　子等館　古へ物忌の
子等云人と式に見へたりといへ一人のことなりにや
子良とも云式にいふ齋の館是なり開化天皇
の御孫丹波の道主命の裔八乙女正殿の倫

を祈りて御戸を祈ふ則物忌の子等の始也
今に大物忌子良同く父同く母等大内人の
齋館也土佛系諸記に南京に巫女なく子良
とて初雅の乙女いそ夫婦のまさしく始御結
を結ぶるといへ深に是なり
高宮爲姑　子良の館の前にあり　国見社
藤社　北御門神社　是より下向一の爲姑
出家也　茜根社　青無山　二尺の石に
同じ名の山又高倉宮　天日別命　大己貴命

二所を祀り俗に天の宮戸といふ土佛と云詣記
に高文和文ナリのうしろに春代の宮堀ありと云
ハ貴此事也異所本縁に十二所の宮所あるよし
見く侍ると今はさらに知る人をまれなり此宮所
ハ上古伊勢神宮宮所の跡なり後春日
戸部高雄命頃と後しくはると和文御詣雄
の時高雄の神とは河内国高安の社に遷せ
しよし御記に見るせし宮所中ノ奥に詞を安
して法槐を勧せ此所小祠様の事を云詣の人

人に書くめて植させ侍り又宮所戸の所のうしろに宮此
菓店あり是より見あらせは山田の町より続て
山川をれやうに見へて汎宮れとしるき所也
君が代に通りはあらしなくしや　後鳥仲房
後としにはそめるとしあれの水
其横井に高倉此西夏国山此下(フモト)にあり古今新
名所に
万代をくむとも清きしるしや　後鳥延株
下よりくるはしあれの水

此水ハ春神交ハ此佐を始く水なりといふ
岩戸より宇治へ来り頃頃路にて大ニ坂場
小坂場 市原谷 瓶坂 大黒ヶ谷 生の山場 なとす余
町を経て器和へ出り高神山の新頃ハ処賀
年中に到しけり今路にて神社又近き此古語
記にあらはれたりしとし
大岡玉社 高神社 斎神社 豊宮崎丹定清水
神田と器に
あたりとす 小梨谷山来社 氏神社 天の村雲此命にて
和気の祖宣成命
氏の祖神なりしを滋波山
といふ又神戸なりといふ 田上大水社 大神ヲ小平と云ひしの
岩屋なりといふ

伊加利社 俗こうちゃ森といふ
二ツ 淋山 多の神也 豊宮崎文庫 岩戸となり
もてて右へ行道記の方あり 浅光明院の渡安
元年創建して経緯を納め器者に伝り其諸に
天下太平此余表なり 武列今渡の文庫 廃亡の後
ハ是を中興といふべし 山ヶ崎 駒渕 うつ木原
亀ヶこりなといふ 古記不しきとし 行合橋 延ち橋ハ云
器和へ行大路の
百の小古橋なり 錦浦 大海原ともいふとうや 器和の里町屋立てき
て不起ハしき不なり 余交此事此町如尺町等の
市にて土宜(ミヤケ)賞給てくり 田賀ハ搭と行家返

此邊名にしおふ伊勢おしろい或鍾馬の細工
なり家あり又是は此まゝ諸國にて之紋の紅粉
を書付りしを俗に鳩の目をしゆし通諸一文
とれ此諸格式とゝ神前の幣諸にし或ハ道
路の乞児にあたへ付りし漢人紙錢を作りて神
を記せし風にちらきゝ百年前にハ勢州宮諸
の内字紋の洞と行ひ付りしてゝや今も古諸の
中に彼洞諸まれ付り神田唐代の諸文ハ拾芥
抄に委くしるせりそれらしの書にも三才圖繪泉

志等にも日本諸とのせ付り
深あり如きみちもれ百うき言ハ
志くしてかゝり器ありさしし　大中臣定忠
瀧浴の山ア志に中庶ハ書は
祿さ先さ記しき器ありさしし　西行法師
此等ハ分山下ハ幽情とよめりむかしにさこそあり
りれ今ハ市中の喧きのこゝろ賽（ヘン）錢（タイ）ありなり
はせ此ありさ後ありり　報嶽　蓮花寺
岩出祭を從之經
親定の建立下云ゝ　秋迦葉　孝臣秀吉建
られしこゝろ　小田橋長

小田は原と云ひしは此所とも椿の在所を御贄川
といふなり　妙見所　貴まさ所つゝき市とも上
旅人の宿とせり也　妙見堂は貞觀元年に建し
よし関係家は本縁記等に見へたり妙見とは七佛
諸説神咒經に祇是北辰菩薩名曰妙見と云
宇治器をもいふ以下へは長山頭と呼ひしと語の
在所は相樹は天正年中田丸の城を稲葉藤人
越智道前寺行して持て立し樹也とかや春は
いと面白き所なり　頂山　尾上山の上にあり

俗には八幡山といふ百の山より坤の方に山見へたり
雄略天皇二十三年春二月　綏媛命尾上の山
に石頂しのしふよし世記にあり此山を宿在本縁は
玄扈（ケンコ）とも半里又天福寺山ともいふ上若寺
といふ寺を　庭明寺　舊社は寺院にあり
或人云綏媛命石頂の御詠は此寺院寺所の
内面の方俗にこめ望と呼ぶ也古へ云し頂望なり
と云ふ東国より渡海の家を又人大藤川傍に忘れ
して此所へ出る凡尾上頂より間ノ山宇治の入口

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

奸賣俏の徒に惑き或ハ剃分桃の愛に
むかしまて戦を捨て名を稱せしむ事にしも
うきしまさまとも敬神致誠の余路に於て
かゝりおもむきありとも覺へは異邦といへども
れなし人情風俗をかゝや五雛俎に諸民無不
住泰山者其齋戒盛服虔心一志禱祠以畢
下山舍送號則開齋宰殺狼藉碎舞喧吸
悪童欲偶之不押矣史既不能致謹於平
日又不能致謹於事後其齋戒不過以欺

神明ていへり嗚呼我國は余文人を見ることなし
さりにや誰か朱子胡氏の客館に題せしまし
詩を味知へし　不動池　古市町の後南
の谷にあり首云頃池は此所にや今未下と云
眞某を號し書家なしあこし某は大章式に
稱糀と書順の俗名に粧粧の字を用ひらまし
しかと別とのにや　帝京景物畧にのせり
歡喜園は三十餘方神國のあこし某と同しく侍り
景田町今在家といふ所の葉に高きにありて麋

西の谷に西行法師住し所也夜坐更闌賦
未熟情(マコトニ)知辨道可山林濱声入耳月到眼
此外更須ニ何用心といふ侍も西行の作といふ
こゝに又都の居已志りそもむ
山下そうされ名は宇治の里　圓位上人
宇治山　佐古久志呂宇治といふ古記にあれは
宇治は佐法座王家よりの御号なり神祇百首に
神の代は春や立川この宇治の里
都乃宮もしら朝霞むしき　元長

常光院　臨済流の臣寺より世に伊勢の上人
といふ辨才天祠　此意は詔刀師の家なく
縁はしき所也　不動堂　和家の釈伽堂
と同しく天正中の秀吉の建立と云
法禾舎　須宇多院の勅建といふ
林陽の文庫　宇治橋の西にあり貞享四年に
建立し常者を集む寶を又書なく集て
諸習は伝りありいと同もなり
林陽ハ前にはいふて返りくき

清みの山郷をあなたゞめて　長明

里程抄四終

里程抄第五巻五

橋姫社　山城は宇治橋にも此祠あり葉塩
草にも出橋をちり神ありよしいへり袖中抄の
顔も同し草茶和言集にハ又の名を玉姫に
いふよし見へたり橋姫の地をたりハ悔異の事を
たりたりにあらはれ
宇治橋下馬の御橋なり兵杖止敷和文
の豊川の御橋のことし橋下に乞食多く集て

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

教誨を愛者侍り此橋を始とふ評々永享
七年前將軍源義教造進の事ハ神皇年
暦に見へたり又此所のきたに伊勢大神宮
の御詣あり祢諸女帝天平神護二年に建り
進しつゝ嵯峨山院の治長年中に焼失して
今ハこゝあとのみ御立り是より前ハ今の橋より下に橋所
橋とうけしよし御記に見へたり 此の方に朝熊ヶ所ハ
大水社 岩田山の頂にハ 汗長社同し山
の林藤にハ 祢宣の斎館 和宮の下に安詣り

車宿 此辺むかし民居なりしに寛永の法
祢に家を作りしを禁せし事後再び
民居となりたりと代々いましめなひし事皇
字御法文に見へ侍りと又いつの頃より立家
立つて居ていとも分かハし大宮の社を立
えてくるかしさりしかハ近世大司精長従二位
氏冨に共に議し云に中御例に立てうひて民
家三百余宅を作て移されたるより難けさ
神路山の御祭ありしか無し成して其外ハ一ハ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』　請求記号 860-27　　ガラス使用

君か代はひさしかるへきためしにや
いすゝ川のなかれたえせて　大江匡房
神風やみもすそ川の流こそ
月日とゝもにすむへかりけれ　後京極摂政
此川の中洲所を神か所とえらひてや祠官法達
拝所は川中に玉串ありて常に是を封て
神秘の事とす
二鳥居　膳舎　九丈殿　今は五丈殿の事なり／今三宝九丈殿の名のみなり
由貴殿　氏神社　御酒殿
御文　主神司殿　忌火屋殿
御輿宿　外宮遥拝所　舞姫候殿
斎王候殿　荒垣ノ御門　俗二十二所ノ御門といふ　石壺
東は勅使参王大司神司の斎西は禰宜玉串
の内人等此拝所なり宣命詔刀よみ給ふ所
外宮のことし玉串は此下人等の預遣て八重
榊を廻らし神拝常法なりとぞや
榊として中川の石壺路となりし
君とともに初日のこゝやらん　荒木田延成
三ノ鳥居　八重榊　鳥居の内の柱根神なれ

相とす柳の枝なと故實秘事あり事とす
諸人本式ハ八重柳の下にて相とすなり
今石臺を鄰て相すりハ家相諸也　玉ノ串御門　宗文
の男女まとなく織となく皆此所の御門にて相
なり　蕃垣御門　俗に猿頭の御門とす
瑞籬御門　是より内ハ御内院也

内宮正殿　東戝殿　西戝殿　延喜式ニ云在度會郡
宇治口五十鈴河上自御鎮座宝永元
年凡一千七百八年也

天照皇大神宮ハ垂仁天皇ノ二十六年丁巳九月
十七日御鎮座なり和宮より四十二町内に御座
ますと故に内の宮といふ又伊勢国土記にハ宇治
の口と内の口とせしなめしあれは宇治の文
なりともいふ神名秘書にも此二説をあけたり
又朝日の宮五十鈴の宮とも称しなり
天照山神路山大山と係分に諸日ハいつもに
内宮の御山恐号なりてうや此神木を百枝
の相といふ係分に相同しにあり

神国にあまてらす神おはしますゆへなれ
はかりことしともいふへきなり　須原枝斎校改

三種ノ宝器ハ天壌ト倶ニ太神傳授ノ蓮ニ白王圖
就中ニ面ノ命耳提ノ處視ニ宝鏡ニ當ニ猶ニ視ニ吾　山崎敬義
此文和文別文皆草葺（カヤフキ）にてましますは上古
質素のさまをとゞめて神人の驕をいましむ
つまりみや中美の清廟明堂なるを萱葺
なりよし曰安民春秋三輔廣圖記傳の諸
おもんみて粛然清静の意といふをおもはは

倭漢一般の法なり
荒（アラマツリ）祭宮　下宮の西の方にある宮なり
苔虫（コケムシ）一下本ノ社　外幣殿
御倉　此御倉御稲を収め内宮御稲を之に御撰
見を納て以て御精園を取り御正印を籾
小依り祠宮にも同し淳礼の事ありとぞ此倉に
稲霊（タウノ）宇賀ノ葉多麻ノ神を宗祀せりとよし
太田の命の傳にみえたりといへり神名秘書ハ大宜（ケツ）
都の神と又ハ三狐（ケツ）神なり世に稲荷と

狐なりといふも三狐の文字より附會しなり
なや民間にしやぐじといふ祠あるも三狐（サグシ）神の訛
なりとて佛者は宮祭神經をいふ也と作て
辨ず天也とのたまり曲学の人は春秋佐助期
等の書を說して五穀の神名といふ皆祕密の
故をもてもて辜合の異說をなすなり
むべきかな
奥玉（シキタマノ）神洋所石極　本神宮の乾のうしに在
宇治の地主の御神なりとかや　神室日出

祕府を按ずるに猿田本神を記す往古より
舍代（ヤシロ）を建ず柳とかし御解とするよし又
なり神箭（ヒモロキ）の習ひありて拜て神祕の事
とそ取り侍へ給ひ
袁御門　こゝは御院の上下にむかし（ヤシマ）也かく
不敬をなすて事なかれ
荒祭ノ文　本神宮第一の列殿にして御
具なり御神なり其宮の人祈願の事を
御和二所ノ御前にては中臣にして御宮にて

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

いにしえ斎宮の女御の御豊水にまむまを
しけるりこゝや今も和使来向の時手水を
信花遥洋所　五十川と隠くをくはせしむ
風日祈文　正應六年三月二十日宮号を
来しせしは是弘安四年蒙古の賊神国を犯
せし時神風忽胡塵を拂ひぬひし故こゝや
元元人家国を犯せしも元史及び神編年
集成歴代皇紀関東評定傳根元歴代
国八幡愚童訓等の書にくりしくアルなり

能関河合社　祠なし風の宮の前の流落合にて
はこまりこゝや養都渡神にて水霊を祈せ
よしなり積門等に集に於信正通海此こゝ
にて読ひ奇あり
月冬たゝや神路の峯に出ぬし
渡河はかしに新をたてしき
八百會社石積　俗に木筆の宮をとしよ
みや河原祓の神を祈ひとしよ
滝祭宮遥拝百石檀　神殿　建御名方

命を乗れ文安三年九月ホ三日山賊棟岡へ
乱入せし事夜宣給祢可祢異ありし事
續祢皇正統記に見へたり今世御馬に注
紀伊云の事家よりかくなしせるにとかや
式に櫪飼の御馬といふは是なり
此處の市を麻笘乃ひ古宣物と書れ者若
耳苦は東首瀬といふ所よりむして安しこ
記さ御待日
高倉殿御詣　御殿の後に石垣あり山祢ノ社

宕井田にあり祠なく宕をれ祢祢と云
右御宮の文廻り御不畢ヌ所に案祢名は略記
東社にて考えり
伊奘諾宮　宮治仁中村に在ス貞觀九年分宮号
月讀宮　同所に在ス伊奘諾の文と同附文号と云
瀧原宮　聖座村にあり　兼ノ宮同上伊雜宮
志于玉砂朝村にあり此五所に上に記せし荒集の文
此日祢の文を合て御宮七所別宮といふ志ある
人は言へ○案へまゝまゝなり

太神宮神殿或間と梅ちりに俗にいふ八十
末社といふは神宮の古記に所見なし内宮七
所の別宮和宮所の別宮の遷造宮使
より造替ありし内和十二社の御神或は宮帳
にのせし内和四十所の摂社等は世に知る人
なき事にならはしまゐりて今内和ある宮の
宮廻りに称して諸末社の遷移所を持ます
さ小祠内宮にてはあり宮の東南に遷ひり
大山祇社より大土御祖社まで凡六十八祠外

宮は大宮小鳥居の遷しりあくまゐ小鳥居
東くめくり南にまゐり又小鳥居の東へ出ら宇須
登社より高田の社まで四十七祠あり是は宮
永年中建のひしこなりされは根本二宮
の末社といふは大宮中にならて所も隔たり
し社なし大司大中臣感應仁治宮元の比
式内式外の摂社を大略遷移せしよし
神宮の御記にてへり遷き宮文三年に大
司精長再興せしとし時社地のさしあり故

見ありしか元祿五年大司長春度今延
昌延結構成胤等と議して拵社をあらたに造
替し御を接て中古へ立へり侍り事いとめ
て度事ともなり猶延經神名略記をあら
ハして末への代は證となるさしむ是皆治世の余
沢にして神宮万年を説ならふ據より正保四年
後てふしき 正保四年は後光明院の
廿百九三百十七年也 公卿奉幣使
を御具行のとき參議從三位藤原綱光卿ノ始
天武天皇元年壬申遺二路直益人一 淳二宗廟一
正位奉幣ノ始は聖武皇帝天平十年五月右大臣正三位橘

諸兄至醍醐院喜屠
三年九百十五度 内外まゐりも神も頭を見て
くらや後ゝりをつゝ御代の祐ゝて讀のひし
ゝ清御再興の御事を打つてき侍り故安家の
神人も興起の志れこゝろす内長岡田神宮は
神ニ侍郎連乃ひ神ニ麻續連等へしく所を
さりて神衣の祭もそゝ名をかりをを御
祭をとめしへ人ハ安氏神衣調進の事行ひ侍ん
外宮にても祈年祭を再し行ひ是て万
古へに准せらる實に恩仰の表とみるべく是

朝熊社　朝熊村の小藤（カノミ）海村の東なる山の上に
ましまし給ふ寛に伊勢の地主の御神なれども無妄
の人あるべき事にさらにや
朝熊は海や岩根の御くらゐ年始まれば　神を尚長
蔵のかくみのしけそくそくなる
今到読寺　朝熊の岳上に建川内家より
五十町余の小路なり淳和帝は天長二年宵
十六日弘法大師登山し水閑（ゲモン）持（ヒ）の法を修し
虚空蔵の像を彫して安置せられしとかや

中比より禅僧の有ことなり中興の祖は東兵文（ブン）
日立（イク）佛池禅師なり今京師天龍寺に属
す御ても虎溪院明王院は真言宗にして
同祖の法を修く侍りとなれ諸堂立ならひて
無畏の事院に射元録十四年立僧の事ありて
いと清らかなり　岩和　俗に伊辨の大歳（ジヽトシ）
の神天より京降のひしにかゝるなりといふ
明星水連珠（ニ）池
心にてあさ法の中まに在ひぬ也
のりにつ也海のそし此夕言

住佛谷

雲見峯なとも名にあらはれ又朝熊の様花
は日むかれ神は花なりよし古田の今の侍に入るなり
又西大寺の史圖に文永十年の記に様大刀自
余は御神神なり事といへり近比後今発住
遠懐のかりに

神代しを今こゝろしき朝熊や
たゞぬさくしの程子ねしをして

侍云仁明天皇は兵に延年ありしとも其

此境より眺望をもて是を海雲につゝなり山高
海岩絵かきりかことし氣をもてしてくれなきあれは
は富士と見へ侍り諸にたくひなき勝地なり
所見社 東は玉津御祖社西は大土御祖社横社
の尾張村に在ゝくまべは菓花ありて桜真の地
二見浦 内宮より三里もとより神能なりしか
中は武家押領せしとて寛永十年六月なの
ことくしかしてもしとなれ

ますかゝ見ふる見は御ふみかゝ也て

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　ガラス使用

の往し頃あり辛泉院は伊勢三郎の名
し所とかや硯洗水とて得りし池あり村郷の濱は
假脱（イミフク）年ヲ至て水を浴ひ地なり荒野なといふ事に
祇泉或頃か御祓（フセカ子）といふあり實はあるき神殿
なりといへり伊勢三郎の名ハ白河村に御出
于今三河洋は濱荘の名所いせ碍法きなきさ
等は古頃多しむし二人七郷といひしかむ口
此里はこゝへかりとかや伊介（イケノリ）厨（クリ）浮碍ノ御厨は雜
例集に見へたり

相にふくいけの山は見えし
なるにはこゝらしき碍の世
此頃は長明伊せの記にあり彼記にいはく二人の者云
山にんこのありて遥に海山と見る有東には三河遠
江濱河なとを見こして富士此山は此のかゝ見る
畏（ウシトラ）にあたりて甲斐は白峯（シラ子）給渋の三坂あり
水に西濱尾洋の山も此うへより加賀は白山
見る乾に安藤の山諸庫は三子山西に都留の
山御香山又伊賀は国の山も三名とて此東

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』 請求記号 860-27　　ガラス使用

を讀て兩宮及び攝社の古記錄を有歷代
の撰集を見て其經歸を考へし參宮の人は
必云色禁忌を守りて緒にも穢に觸れ入らず
夫齋戒の法は神祇令弘仁格神祇式及び
鎮座傳記文保記神祇本深禁誡篇
等にくはしくのせられたり仕宮の身は今日國家
此服忌令を守へし忽(つれヤセ)に其ありまし給へ

自大和國伊賀國へかゝり伊賀へ出郡是經
昔此東海路より故に大和に出て伊賀へ
夫より伊賀と出す事し給へ

和州大和日 二里 加茂 二里 笠置 天和各記に笠置山と云ハ是也一里半
大河原 一里三十丁 伊賀國鍋ヶ原 二里
上野 五里 阿波 二里 長野 四里
此所へ 三里 日本 一里 松坂 哲州
右を伊賀越といふ又かゝる越ともいふ

自大坂奈道　西国よりの奈宮人皆大坂に志得て

大坂　五里　牧方（ヒラカタ）　三里　淀　一里十二丁　伽尼　四里

大津　自是来如左　又大坂より長谷越の路程記

大坂　三里　松原　五里　東高　三里　丹波市　二里

三條　三里　長谷　一里半　たい原　三里　田口　二里

むらのまち　二里　すか　二里半　石名原　一里半

田け　二里　仁加木　二里　大石　三里　大加　三里

田丸　一里半八丁　川瑞　一里　山田

右此路元祿十二年所設道中小路に要故畧之

自江戸奈路凡東海路及ひ東首路を此里程を記せし

書多し故に畧之東海路之列吉田分祈にて志に皆列

河碕まで海道すりもあり東首路は渋列山田より谷

陪賀を三里十丁谷陪賀より小坂へ三里小坂より

なこやへ三里名古屋よりいせ奈のまし

自紀州参道

若山　三里　宿手　一里　かせ田　三里

橋本　二里　五条　二里　古田　一里

上野　二里　大野　一里半　鷲賀　二里
コツ　三里　ハゼ　四里　七日市　四里
高岡　三里　カイミ　三里　二ウ　三里
田丸　一里半　宮川

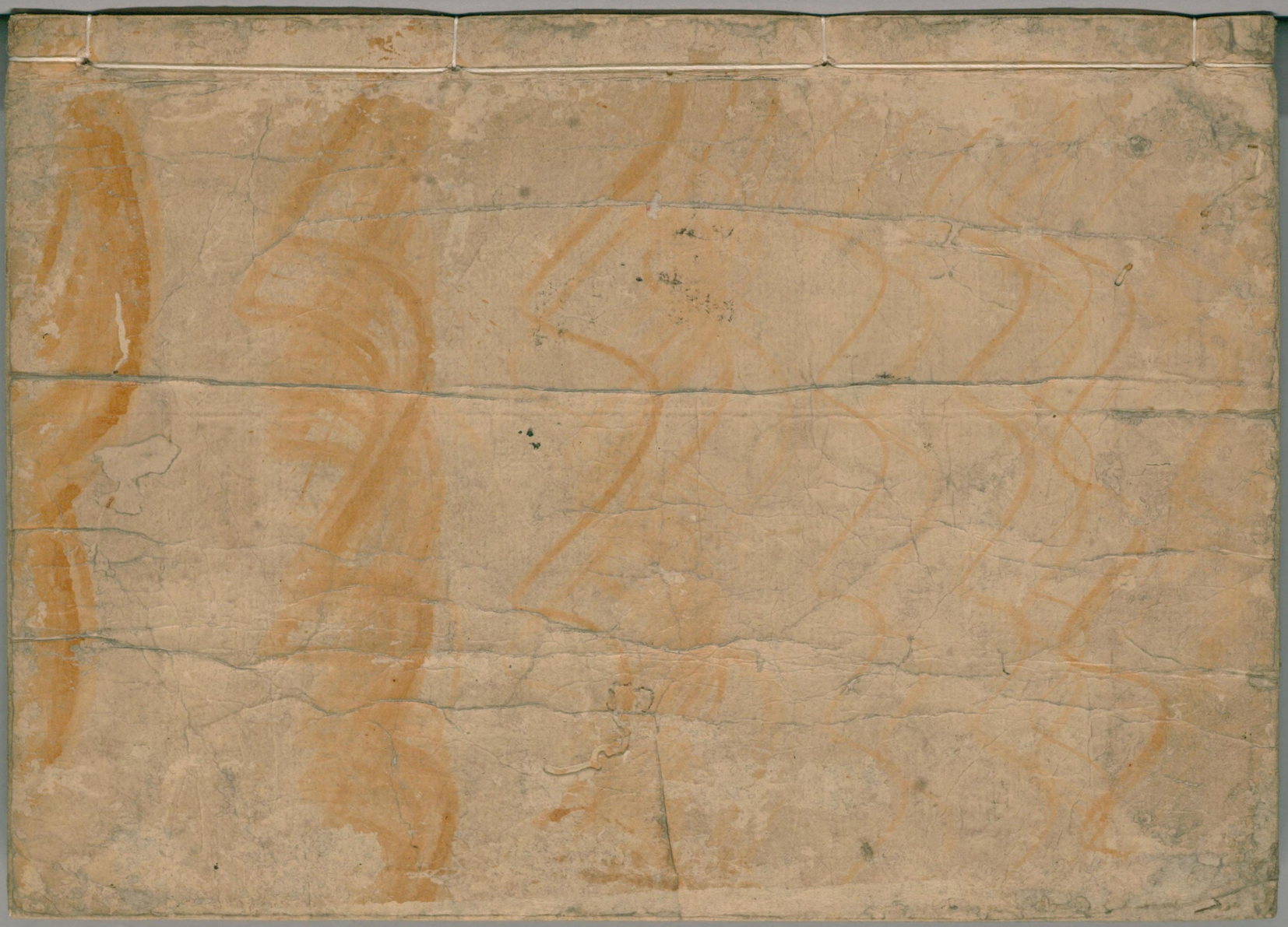
自北国来路江州古山へ出る坂の下関の近分より
来也此外路節あり今略之

宝永元年甲申秋九月十七日

里程抄五終　尾府泥江縣祠宮源室具　藝志

860
27
5384

右来宮里程抄全部五巻ハ尾陽之士宮
天野某隠名信阿の著もりとこれ也といへども
故ありて廣井の祠宮室具にあらへて世に
行(モテユキ)ゆるにて全室具の誌書と誤れるなり
後世ぬ信阿深陀佛の著ならんもしを

国立国会図書館　タイトル『伊勢参道里程抄 5巻』　請求記号 860-27

ガラス使用